

名古屋市守山区牛牧遺跡立会調査 概要報告（付載 春日井市松河戸 遺跡出土琥珀製品について）

● 川添和暁

名古屋市守山区牛牧遺跡では今まで知られていなかった縄文時代後期前半期の包含層が確認された。この概要を報告するとともに、今回の発見の意味について若干の考察を加える。また、付載として、春日井市松河戸遺跡出土の琥珀製品についても報告をしていく。

1 調査の経過

ここで報告する調査は、県営守山住宅建替えに伴い、愛知県建設部からの依頼により、愛知県教育委員会が行った、立会調査の概要である。筆者も牛牧遺跡の調査に関わったこともあり、これに同席した。調査日は平成14年9月26日と10月8日の二日間である。

2 立地と環境

本遺跡は、名古屋市の北東部、守山区大字牛牧・高島町・小幡中三丁目周辺に所在する。庄内川と矢田川に挟まれた熱田台地相当の守山面上にあり、庄内川方向に下がる台地縁辺部に位置する。現在までに数次にわたる調査が行われており、発掘本調査では、1950年代末に当時の守

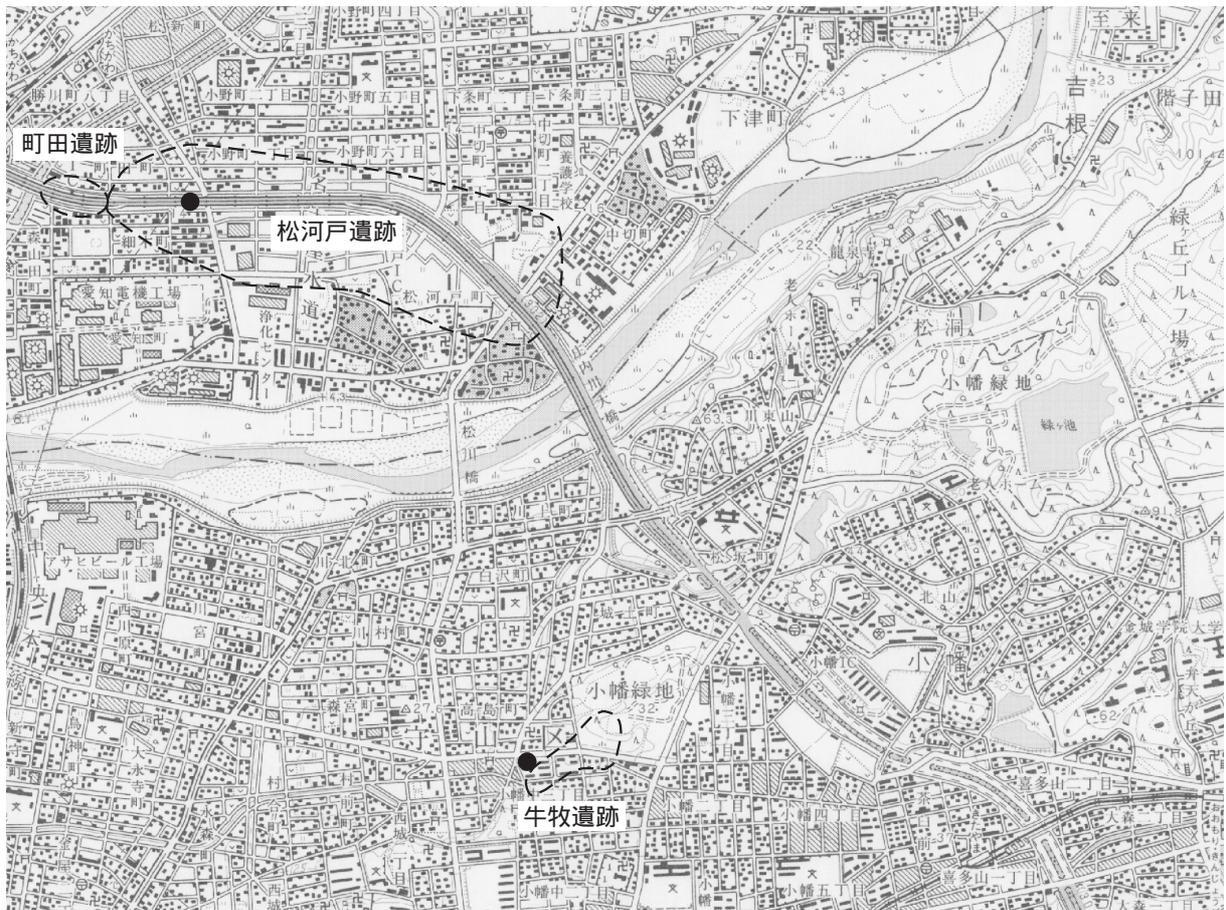


図1 関連遺跡位置図（S=1：25,000 ドットは特に今回取り上げる地点）

山市教育委員会による調査、1961年に名古屋市教育委員会による調査、1998・99年にわたって愛知県埋蔵文化財センターによる調査が知られている。今回の調査対象地点は、今までの本調査が行われた地点より西に200mほどのところであり、現地表面の標高が5mほど低い。

3 調査の概要

調査対象区内の4分の3ほどは、現地表面1m70cmほどで守山面の粘土質シルトの広がりが確認され、遺物の包含などは確認されなかったが、区内の北西側に落ち込みが検出され、その中から遺物を採取することができた。基本層序は、上から大きく～層に分けられる。層は近代の盛土、層は礫を多量に含む黒色砂質シルト、層は黄橙色の礫層、層は暗灰黄色や黒褐色を呈する粘土質シルト、層は礫層である。遺物包含層であるII層からは、非常に摩滅を受けた

縄文時代晩期の土器片が採取されている。礫の混入が極めて多く、二次堆積ではないかと考えられる。無遺物層である層を挟んで、遺物包含層である層は炭化物を多く含む一方で、礫の混入がほとんど見られない均質な土性を呈している。出土遺物から、縄文時代後期の範疇に入るものと考えられる。

今回の調査では、層と層とに含まれていた炭化物を対象に、14C年代測定(AMS法)を行った。結果は以下の通りである(図3参照)。

- 3層 10YR2/1 黒色砂質シルト
2470 ± 35 B.P.
- 6層 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト
2375 ± 35 B.P.
- 8層 2.5YR4/2 暗灰黄色粘土質シルト
3025 ± 40 B.P.
- 9層 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト
3430 ± 35 B.P.

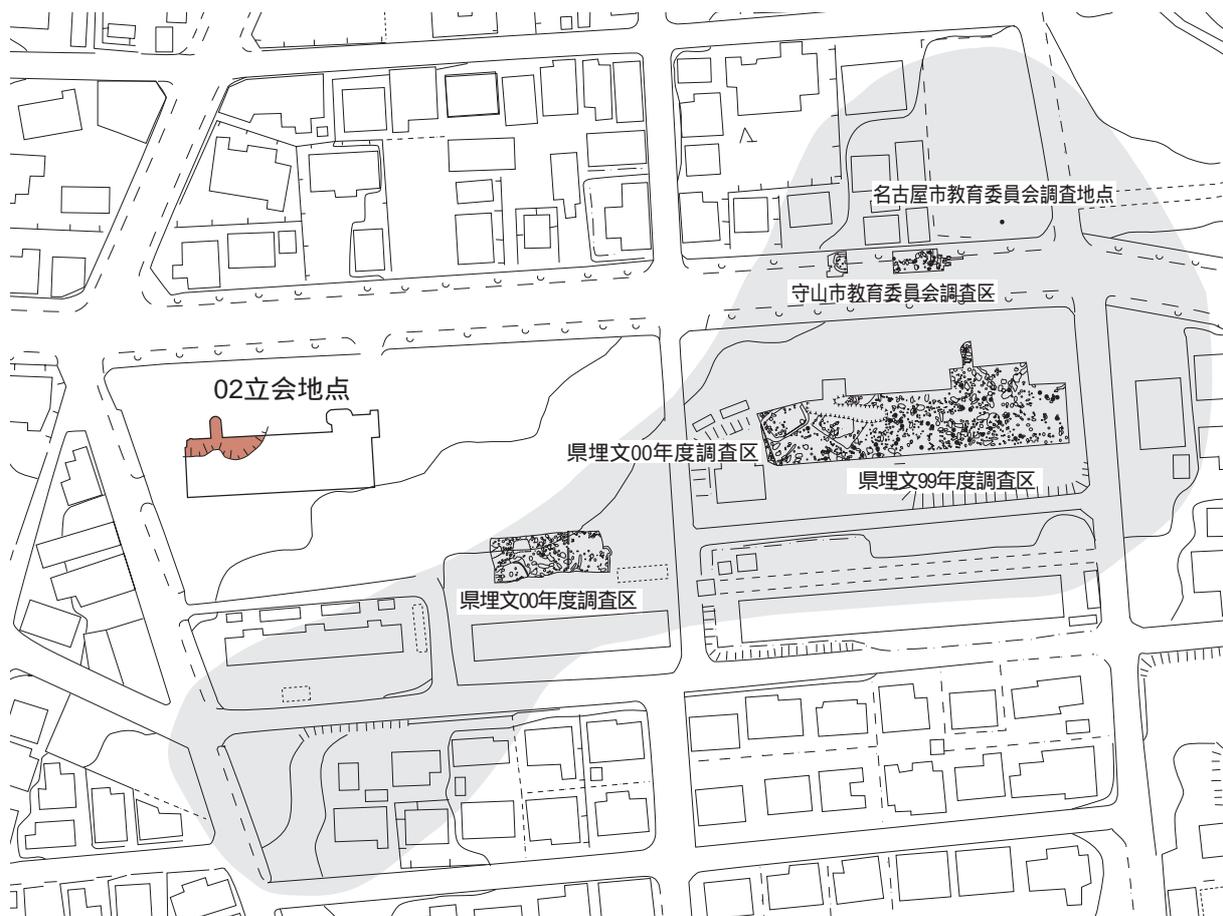
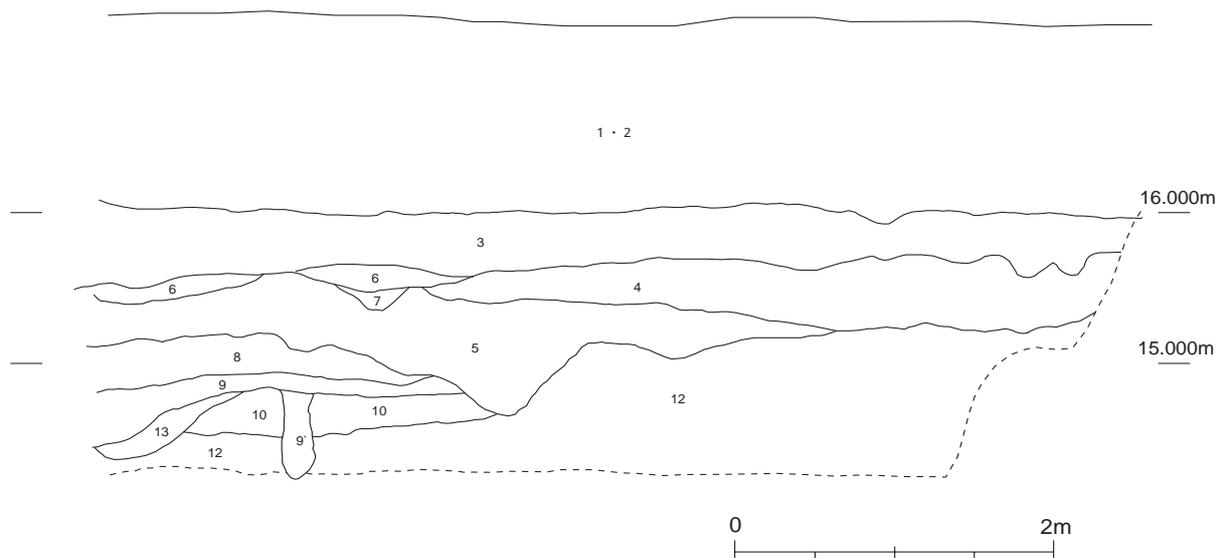


図2 牛牧遺跡調査地点位置図 (S=1:2,000)

この分析は平成14年度瀬戸市吉野遺跡発掘調査における自然科学分析の一環で行った。



- | | |
|--|---|
| <p>I層</p> <p>1 10YR7/6 明黄褐色粘土(盛土)</p> <p>2 10YR4/4 褐色礫層</p> <p>II層</p> <p>3 10TR2/1 黒色砂質シルト
径2～5mmほどの礫を多量に含む。
しまりは弱い。</p> <p>4 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
径1～3cmほどの礫を多量に含む。</p> <p>6 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト
径2～5cmの礫を多く含む。</p> <p>7 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト
礫多量に含む。粘性若干あり。</p> <p>III層</p> <p>5 10YR6/4 にぶい黄橙色礫層
12層の礫が動いたものか。</p> | <p>IV層</p> <p>8 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト
炭化物を多量に含む。細粒砂多い。</p> <p>9 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト
炭化物多く含む。</p> <p>V層</p> <p>10 10YR5/3 にぶい黄褐色砂層
中粒砂多い。炭化物若干含む。</p> <p>13 5Y7/2 灰白色粘土</p> <p>VI層</p> <p>12 礫層</p> |
|--|---|

図3 牛牧遺跡02立会地点北壁セクション図 (S=1:50)

前回の報告において、層の礫層を熱田層相当の守山面であると報告した(川添編2001)。しかし、熱田層相当の守山面は礫層下深くに存在するシルト層と考えられることや、礫層の堆積状況から、礫層の形成を縄文中期以前と訂正したい。

4 出土遺物

弥生土器や須恵器が若干混じるものの、ほぼ縄文時代のものと考えられる遺物が主体を占める。土器片は、風化が激しく遺存状態が良好ではない。特に層からは縄文時代後期かと考えられる土器片と、石器を採取した(図4 1・5)。1は、磨消縄文が見られるもので、層の年代を考

る好資料である。5は唯一見つかったチャート製の石器で、剥片の縁辺部に微細剥離が見られる。

5 調査の成果

牛牧遺跡の遺跡範囲としては、図2のように台地上のみが考えられていた。しかし今回、遺跡の範囲外と考えられていた一段低位の場所に、遺物包含層が存在していたことは多いに注目される。このような包含層の遺存が見られたのは、現地形では伺い知ることのできない起伏が当時の旧地形には多く存在したためだと考えられる。縄文時代の遺物包含層の存在は、遺構の存在していた可能性も考えられ、旧地形の復元とともに考慮しなくてはならないであろう。

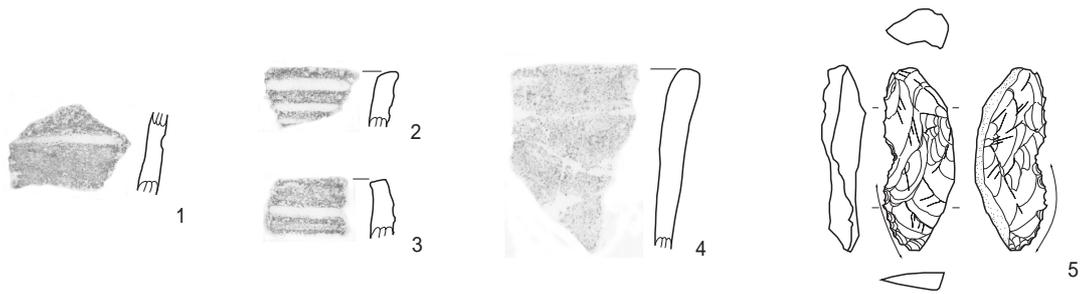


図4 牛牧遺跡02立会地点出土遺物(1~4はS=1:3、5はS=2:3)

また、唯一見つかった石器についても注目される。当該時期の石器群に関しては、近隣では松河戸遺跡で調査・報告されている。この石器の評価をするうえでも、松河戸遺跡の石器群を検証する必要がある。

6 松河戸遺跡出土石器群について

参考にするのは、松河戸遺跡62E・62F区で検出された石器群である。詳細な内容に関しては、報告書・年報などを参照されたい(赤塚1994、北村・後藤1988、後藤1989)。

報告でも述べられているように、出土している若干の土器片は、縄文中期後半から後期前半に属するものであるが、出土する石匙の形態や玦状耳飾の存在などから、石器群としては少なくとも縄文前期までは遡ると考えられる。興味深い点としては、

(1)東西を谷に挟まれた微高地上に展開する集石遺構など、生活に関わると考えられる遺構群に重なって石器群が検出されたこと、

(2)時期幅があるとはいえ、縄文時代前期から後期前半という、時期の絞り込みが可能なものであること、が挙げられる。

今回は、62E・62F区でドット取上げされた遺物を中心に実見した。これらは、各調査区の最下面から出土したと考えられ、出土状況・遺物から縄文前期から後期前半以前という时期的限定を加えることができると判断したからである。資料数は計1,339点である。

表1は器種別に数量を示したものである。剥片石器に関して言えば、チャート製を中心とする小型の剥片石器と、ホルンフェルス製を中心とする大型の剥片石器とに分けられるようである。

器種と石材との関係では、下呂石が同様の傾向を示している。黒曜石・サヌカイト・安山岩・土岐石は剥片のみの出土で製品はみられなかったものの、小型の剥片石器を対象としたものの可能性が高い。小型剥片石器を確認個体数の多い順に見ると、使用痕剥片・スクレイパー・調整剥片・石鏃・石錐・石匙・楔形石器である。使用痕剥片とスクレイパーを合計してこれら石器の半数以上を占める状況は、この遺跡の性格を考える上で重要である。石核に関してみると、その存在がチャート・下呂石・安山岩で確認することができた。特にチャートについては、石器の未成品をも含む調整剥片の出土がある一定量みられ、当地ではこれらの石材を使って石器製作がなされていたと想定して差し支えないであろう。大型の剥片石器としては、打製石斧のみが確認されているが、数量的には若干である。それ以外の石器も存在はしているものの、数量的には希少である。

次に石材について見てみたのが表2である。製品・剥片・残核など含めて、当遺跡で剥片石器に使用されたと考えられる石材全体の重量を比較した。チャートの占める割合が95%以上と、圧倒的に高いことが分かる。庄内川流域はチャート帯であり、チャートの使用は付近で採取される石材を大いに利用した結果であると考えられるであろう。チャートの次に多く見られるのは下呂石である。今回風化面が確認できたものに限って言えば、表面風化の著しい円礫のみであった。その他、遠隔地石材と考えられる黒曜石や、サヌカイトの可能性のある灰白色の安山岩系石材も、若干ではあるが存在が注目される。

この石材の在り様は、これまで知られていた縄文後期後葉以降を主体とする牛牧遺跡のそれ

表1 松河戸遺跡 62E・F区出土石器数量一覧

器種	石 材											点数	
	チャート	下呂石	安山岩	土岐石	黒曜石	サヌカイト?	凝灰質砂岩	濃飛流紋岩	ホルンフェルス	溶結凝灰岩	緑色凝灰岩		不明
石鏃	38	2	2										42
石鏃	16												16
石匙	11		1										12
スクレイパー	70	1						1					72
使用痕剥片	105												105
調整剥片	57	1		1									59
楔形石器	2	1											3
石核・残核	31	1											32
剥片	928	23	1	8	7	6		4	2		2		991
打製石斧								2					2
磨製石斧								1	1	1			3
磨石・敲石								1					1
砥石							1						1
計	1258	29	4	9	7	6	1	1	8	3	1	2	1339

とは際立った違いを示している（川添編 2001）。先の報告では、石材比較について製品と剥片・石核とを別にし、前者は点数で、後者は重量で行うなど統一性に欠けているものの、以下のようなことが伺われる（図5・6）。

- (1) おおむね下呂石が多数を占めること。
- (2) 下呂石角礫が存在すること。
- (3) サヌカイトと思われる灰白色の石材もある一定量見られること。
- (4) 黒曜石も見られるものの石英もある一定量見られ、その一部は黒曜石に酷似しているものが存在すること。

(1)・(2)に関しては、斎藤基生氏や田部剛士氏の下呂石石材流通の研究が参考になる（斎藤 2002 ほか・田部 2001）。特に田部氏は後期以降に下呂石の流通が広域に展開することが明らかにされており、その傾向の現れであると考えられる。一方、(4)に関してここで考えてみたい。黒色の石英の産出地としては、最寄りでは瀬戸市近辺が考えられる。名古屋市守山区とは比較的近隣であり、在地的な様相として考えていたが、縄文後期前半までの松河戸遺跡では今のところ1点も見つかっていない。後期後葉以降に下呂石に代表される石材流通の一端として、積極的な流通ではなかったものの、想定されうる。今後の検討が必要となるが、縄文後期前半以前に属すると考えられる他遺跡においても、剥片を含めた石器群のなかにどれだけ黒色の石英が見られるかを検討しなくてはならないであろう。

表2 松河戸遺跡 62E・F区出土石器石材重量比

石材	重さ(g)	比率(%)
安山岩	16.9	0.35
下呂石	94.1	1.96
黒曜石	5.6	0.12
サヌカイト?	4.3	0.09
チャート	4569.9	95.36
土岐石	19.0	0.40
ホルンフェルス	82.3	1.72
計	4792.1	100.00

また、松河戸遺跡の石器群全体で、風化面を残しているものがどれほど見られるかを示したのが、表3である。圧倒的数量の出土をみるチャートは原石の出土もあり、原石状態から剥離が開始されたと考えられる。チャート以外は数量自体が少ないため、やや不確実ではあるが、表3からは下呂石もチャートと同様の傾向を示す可能性があり、下呂石も風化面をもつ原石か、それに近い状態から作業が開始した可能性が考えられる。

以上、松河戸遺跡 62E・62F区出土石器群の概要をごく簡単にみてきた。今回、牛牧遺跡で出土した石器は1点のみであるが、後期前半までに属するとされる松河戸遺跡のもの様相の一端を示している可能性があるであろう。

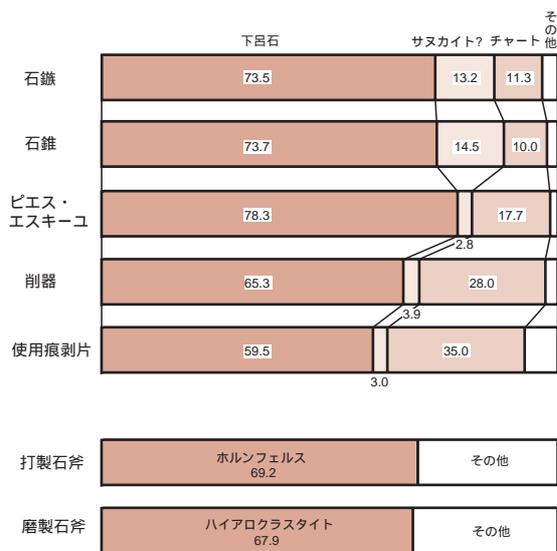


図5 牛牧遺跡出土石器器種別石材比率（点数比）
（川添編 2001 より）

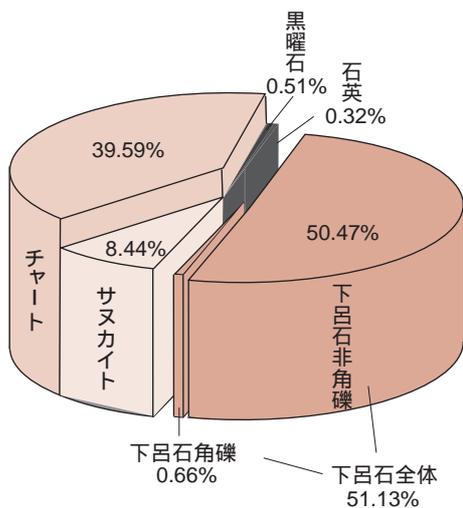


図6 牛牧遺跡出土剥片・残核等石材比率（重量比）
（川添編 2001 より）

7 まとめにかえて

牛牧遺跡で、今まで知られていたよりも古い時期に属する遺物包含層に関する報告をし、それとともに松河戸遺跡62E・62F区出土石器群の概要にも触れた。今後周辺でも同様の包含層や遺構が検出される可能性が考えられる。今回の牛牧遺跡の調査は部分的であるものの、石器製作に伴う剥片の出土は見られなかった。このことは、この時期、当地では石器の製作は積極的に行う場ではなく、石器は持ち込まれたものであ

表3 松河戸遺跡62E・F区出土石材別石器点数一覧

石材	風化面	器種	点数	計	石材計
安山岩	あり	石匙	1	2	4
		剥片	1		
	なし	石鏃	2	2	
下呂石	あり	スクレイパー	1	12	27
		残核	1		
		剥片	10		
	なし	石鏃	2	15	
楔形石器	1				
		剥片	12		
黒曜石	あり	剥片	1	1	7
	なし	剥片	6	6	
サヌカイト?	あり	剥片	2	2	6
	なし	剥片	4	4	
チャート	あり	石錐	11	521	1262
		石匙	5		
		スクレイパー	1		
		使用痕剥片	69		
		調整剥片	30		
		楔形石器	1		
		残核	24		
		剥片	375		
	原石	5			
	なし	石鏃	38	741	
		石匙	6		
		スクレイパー	73		
		使用痕剥片	36		
		調整剥片	27		
楔形石器		1			
		残核	7		
		剥片	553		
土岐石	あり	剥片	5	5	19
	なし	調整剥片	1	14	
		剥片	13		

る可能性も考えられる。庄内川の対岸ではあるが、その製作遺跡としてまずは松河戸遺跡を想定することもでき、今後さらなる検討をしていきたい。

松河戸遺跡では、剥片石器製作に近隣で採取

できるチャートを多く使用していることが再確認された。スクレイパーや使用痕剥片が卓越する石器組成は、興味深い。また後期後葉以降を主体とする牛牧遺跡での石材使用様相との差に代表されるその背景に関しては、さらに今後の検討課題としたい。一方、石材としての黒曜石の存在は、わずかではあるものの遠隔地からの石材流入が継続して行われていたことが考えられる。松河戸遺跡の石器群の帰属時期が縄文前期から後期前半と幅広いためより細かい推定はできないが、後期後葉以降を主体とするこれまでの牛牧遺跡で知られていた使用石材の中に一定量含まれており、おそらくどの時期も継続して黒曜石が流入してきている可能性が考えられる。

最後に、今回取上げた松河戸遺跡62E・62F区出土石器群は既報告のものでは、S-01～10、12～17、19～25、28、29、31、35、36、40～56、59、60、62、65、66が該当する。図面などは報告書を参照されたい。

付載 松河戸遺跡出土琥珀製品について

剥片石器石材としては、地元産と考えられるチャートがほとんどを占め、明らかに搬入とされる黒曜石がわずかではあるが見つかっている。このような遠隔地からの石材流入は装身具などの石製品に散見されるようである。それには、この調査区から出土している翡翠製の玦状耳飾りなどが挙げられるであろう。ここでは最後に琥珀製の垂飾について見ていきたい。

この製品は62E調査区、松河戸火山灰直下から出土したとされる(図7)。現存で長さ2.1cm・幅1.9cm・厚さ1.2cmを測り、断面形状は扁平になる。最終調整として全面研磨により作られており、穿孔は1箇所確認できる。穿孔は径6mmほどの大きさで、穿孔内には製作痕と思われる縦方向の筋が残る。

琥珀原石・破片および製品の出土は、ここ近年かなり増加している。出土は後期旧石器時代から知られるものの、数的に多くなるのは前期末以降である。これまでに報告・集成された遺跡を参考に、縄文前期以降の琥珀出土遺跡の位置を示したものが、図8である。現在のところ、北海

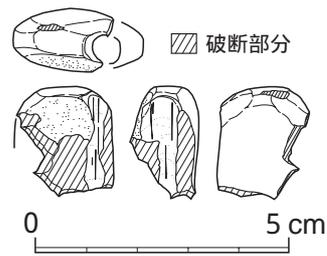


図7 松河戸遺跡出土琥珀製品(S=2:3)

道から滋賀県までに出土が知られ、特に東日本に分布の中心がある。北海道で知られている多くのものは、縄文時代末から続縄文期に属するもので土壌墓出土が主である。本州以南では、縄文前期末から遺跡数の増加がみられ、縄文中期に多見され、後・晩期に属すると考えられる資料も若干存在する。出土は包含層からのほか、土坑や住居跡からの場合もある。住居出土の資料には、製品ではなく破片状態のものみの場合があり、寺村氏は玉類以外の別の用途も想定されている(寺村1985)。現在までのところ、出土遺物と有機的関係の見られる産地としては、岩手県久慈市周辺、福島県いわき市、千葉県銚子市、などが推定されている。長野県諏訪湖周辺で出土の集中が見られるもの、それ以西では出土が散発的になる。周辺の遺跡で、集中出土地域から離れて出土している遺跡に、長野県木曾郡南木曾町太田垣戸遺跡(神村1998)・新潟県中郷村和泉A遺跡(荒川1999)・富山県朝日町境A遺跡(久々1999)・石川県鳳至郡能都町真脇遺跡(山田1986)・岐阜県大野郡丹生川村丸山遺跡(野村1998)・滋賀県大津市粟津湖底第三貝塚(中川1997)があり、これらの遺跡位置周辺が琥珀出土遺跡の西限と考えられる。松河戸遺跡例も含めて、これらの遺跡例はすべて玉類(製品)である。特に、丸山遺跡例は7点も土壌墓内から有意な状態で出土しており、注目される。丸山遺跡No.3「棗状扁平丸玉」と報告されているものが、断面形状も含め、形状的に松河戸遺跡例に近いものと考えられる。丸山遺跡例が前期末から中期初頭、真脇遺跡例が前期後葉、太田垣戸遺跡例が中期後半と報告されており、松河戸遺跡例の前期から後期前半までの所属時期内と符合する。

この資料は、いまだ蛍光X線分析による産地推定はなされていない。松河戸遺跡から最も近い琥珀の産地に岐阜県瑞浪市がある。現在まで

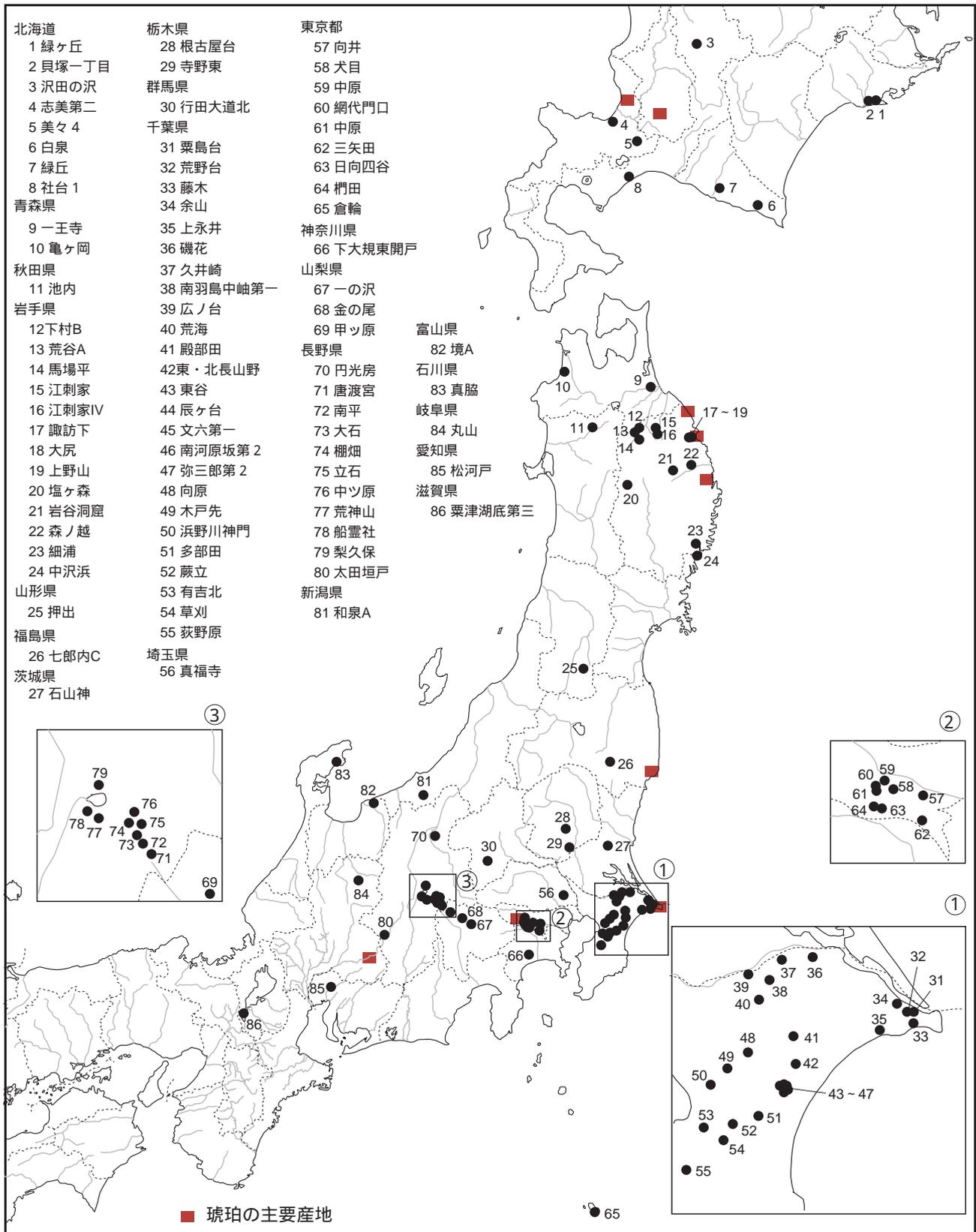


図8 縄文時代(前期以降)琥珀出土主要遺跡位置図

(佐々木 1983、寺村 1985、宮下 1988、中村 1997、神村 1998、荒川 1999、寺村 2000 を基に作成。
紙面の都合により、出典報告書名は省略)

のところ、縄文時代の例で確実に瑞浪産と報告されている例はみられないようである。松河戸遺跡からは黒曜石の出土も見られ、長野県諏訪湖周辺の琥珀出土集中地区とのつながりも考えられるのであろうか。今後の検討課題としたい。

この報告を記すにあたり、愛知県埋蔵文化財センター諸氏はもちろんのこと、以下の方々からご教示を賜った。ここに感謝の意を表する所存である。

伊藤正人・長田友也・瀨織 茂・渡辺 誠(敬称略)

引用文献

赤塚次郎編,1994『松河戸遺跡』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター。
荒川隆史,1999「D石製品」『和泉A遺跡』212～216頁。財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団。
宇佐美哲也・黒尾和久,『網代門口』東京都網代母子寮遺跡調査会。
神村 透編,1998『太田垣戸遺跡』南木曾町教育委員会。
川添和暁編,2001『牛牧遺跡』愛知県埋蔵文化財センター第95集。
北村和宏・後藤浩一,1988「松河戸遺跡」『年報 昭和62年度』60～65頁。財団法人 愛知県埋蔵文化財センター。
久々忠義,1999「朝日町境A遺跡の琥珀玉」『埋文とやま』66 富山県埋蔵文化財センター。

後藤浩一,1989「勝川・町田・松河戸周辺の縄文時代の遺跡立地について」『町田遺跡』78～85頁。財団法人 愛知県埋蔵文化財センター。

五味信吾・野代幸和,1994「山梨県北巨摩郡大泉村甲ツ原遺跡出土琥珀の産地同定(1) 赤外吸収スペクトル分析」『研究紀要』10.27～46頁。山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター。

斎藤基生2002,「石器の石材」『愛知県史 資料編 旧石器・縄文』722～726頁。愛知県。

佐々木清文,1983「(3)琥珀の生産と流通」『上野山遺跡発掘調査報告書』70～82頁。財団法人 岩手県埋蔵文化財センター。

田部剛士,2001「下呂石石材の変遷と流通 主に愛知県の下呂石を中心として」『三河考古』14. 1～31頁。三河考古学談話会。

寺沢光晴,1985「日本先史時代の琥珀 出現と様相」『学部創設35周年 記念論文集』125～149頁。和洋女子大学。
寺村光晴,2000「第IV章 琥珀」『粟島台遺跡』394～414頁。銚子市教育委員会。

中川治美,1997「琥珀製玉」『粟津湖底遺跡第3貝塚』212頁。財団法人 滋賀県文化財保護協会。

中村祥子,1997「琥珀研究ノート 縄文時代の関東・中部地域を中心として」『東国史論』12.25～33頁。群馬考古学研究会。

野村崇作,1998『丸山遺跡』財団法人 岐阜県文化財保護センター。

宮下健司,1988「(5)滑石・翡翠・琥珀製品の分布」『長野県史 考古資料編1(4)』1014～1015頁。長野県。

山田芳和編,1986『真脇遺跡』石川県鳳至郡能都町教育委員会。

吉田 格,1992「縄文時代の琥珀 南関東・山梨県の出土例について」『考古学論究』2. 立正大学考古学会。